

## 発掘調査の概要

### 山田寺の調査（飛鳥藤原第189-11次）

山田寺は、蘇我倉山田石川麻呂の発願により建立された古代寺院です。7世紀の中頃に造営が始まりますが、石川麻呂の死により一時期造営が中断し、最終的に天武天皇14年（685）に完成にいたったと考えられています。

本調査は、史跡地北端の法面改修工事にもなるもので、北面大垣（寺域北側を囲う塀）の柱穴列の検出が予想されました。調査の結果、想定通りの位置で大垣の柱穴列を3間分検出しました。柱穴は大きなもので一辺2m前後、深さ0.9m以上です。長大な柱を立て並べて高い塀が築かれていたことがうかがえます。また一部の柱穴には、古い柱を抜き取って新しい柱に改修した痕跡もみつかりました。同様の痕跡は以前の調査でも発見されており、天武朝の寺全域の完成にあわせ、古くなった当初の柱を抜いて改修されたものと考えられています。本調査からも、この所見を追認することができました。

また、調査区北側では、予想に反して、瓦を組んで構築した暗渠が4条もみつかりました。暗渠は柱穴を壊して築かれており、大垣が廃絶した後に、寺域内の排水を目的として設置されたようです。これまでの調査では、東面の大垣は10世紀前半に倒壊し、築地塀に改作されたことがあきらかとなっています。今回検出の暗渠も、あるいはこうした塀の改作にもなって設置されたものかもしれません。

今回は21㎡の限られた範囲の調査でしたが、調査区内に所狭しと遺構が現れ、予想以上の大きな成果が得られました。「飛鳥は何が出てくるかわからない」との声をしばしば耳にしますが、こうした小規模な調査であっても、おろそかにできないことを改めて実感しました。（都城発掘調査部 廣瀬 覚）



調査区全景（北西から）